

山陰の「小さな文化」を楽しむ

ひだまりのおと

第6号 2024

特集：「ひらく」





ポニーの森（松江市）

本誌『ひだまりのおと』は、島根県立大学短期大学部文化情報学科の授業「文化情報誌制作」の成果物です。

特集ワードからそれぞれの発想で取材先を決め、写真撮影、記事執筆、誌面レイアウトまで、学生が行っています。

目次

巻頭（寄稿）

詩の壁 川辺 真（詩誌「山陰詩人」編集人） 1

特集「ひらく」

ものづくりで松江の未来を【ひらく】—岸本廣美さんの挑戦—（松江市） 2

居場所を、ひらく openspace. 美南（出雲市） 8

島根にダンスの扉を『ひらく』（松江市） 14

心をひらく動物園（松江市） 20

「食」をひらく（松江市） 26

障がい者と社会・人と本を結ぶ（松江市） 32

食文化をひらく（出雲市） 38

空山を^{ひら}開拓いた人びと（松江市） 44

編集後記（裏表紙裏）

表紙題字 篠村優花（総合文化学科卒業生）

詩の壁

川辺 真（詩誌「山陰詩人」編集人）

○県立大学での授業

島根県立大学（松江キャンパス）で詩の創作の授業をお引き受けしたのは2015年度からで、短期大学部で4年、四年制になってからの4年を合わせて8年間（後期のみ）教壇に立つことになりました。授業の目的は、詩作品の鑑賞と創作を通して、豊かな日本語表現を身につけて欲しいということでした。当初、半期15回の授業でどこまで出来るかは全く自信がありませんでしたが、感受性豊かな年代の学生のみなさんそれぞれの心に何らかの刺激を与えることは出来たかなど、今思い返しています。

たりませんでした。たくさんさんの素晴らしい詩人がいて、たくさんさんの良い詩作品が書かれているの知らない残念ですが、新聞の紙面に毎日のように掲載されている文学作品（連載小説、エッセイ、読者の短歌・俳句・川柳作品）の仲間に詩が入っていないことも事実で、このあたりに「詩の壁」があるのかなと思っています。

○自己紹介

「ギターを少し」とか「油（絵）の方

を若い頃から」とか「最近、俳句に興味をもちまして」とか、少し照れながらも初対面の人（達）の前で自己紹介が始まって、自分の番が来て、「詩を書いています」とは言いにくい（私自身の体験から）のです。それは何故だろうか。

詩の授業では、初回に見知っている詩人の名前を書いて貰っていました。殆どの学生は詩を身近に意識してこなかった（中学・高校の教科書で見かけた程度）ということもあってか、毎年同じような名前しか挙がってきません。谷川俊太郎、宮澤賢治、萩原朔太郎、茨木の子、吉野弘、金子みすゞ（童謡詩人）などの有名どころ。俵万智（歌人）も毎年見つかりますが、中原中也や黒田三郎、石垣りん、村野四郎、大岡信など、戦後の

昭和の詩

人達の名

前は見た

中四国詩人会・山陰詩人
島根県詩人連合事務局長
「川辺真」は筆名

ません。

昔、詩誌の合評会の場で、あまり出来映えの良くない作品を批評し合っていたとき、「この作品はそもそも詩じゃないよね」と発言があったとき、先輩詩人のMさんが毅然として「書いた本人が詩として発表しているのだから詩に間違い」と言われ、皆が押し黙ってしまったことがあります。それでも「詩とは何か？」の問いは永遠のテーマで、学生のみなさんには、次のエピソードをお話するようにしていました。

岡山の先達詩人・三沢浩二さんが詩の講義の際に話されたことです。三沢さんは

手をうてば鯉は餌ときき鳥は逃げ

女中は茶をもつ猿沢の池

（作者は興福寺の高僧？）を紹介しておいて、この和歌のどこに詩があるのかと問われ、「手をうてば」ところが詩であると言われたというのがあります。手を打つ音に様々に反応することが面白いのではなく、誰が、何のために手を打ったのかを想像するところに詩があるということでしょう。

短歌や俳句は文字数が少ないので状況や作者の意図は殆ど省略されているのですが、詩の場合も、意味を追いかけるのではなく、行間や敢えて書かれなかったところに注目して、作者の思いを感じ

取ることが大切ではないかと思うのです。字数や行数に決まりがない詩作品において、何故思うことの全てを敢えて書かないのかは、散文の世界で日々生きていく学生のみなさんにとっては理解しにくいのかも知れません。日常と非日常を行き来する詩の世界は扱いにくい。もう一つの「詩の壁」かも知れません。

○観察と表現

最後に、詩の授業で強調していたことに、「観察」と「表現」ということがあります。そのためには「アンテナを研ぎ澄ます」ことが必須条件。日常の中に「詩」を発見することは簡単ではありませんが、いつもどおりではない何かに気付いたら、横着をせずによく観察し、メモを取ることが大切です。そのメモ書きから後日詩の表現が始まるかも知れないのです。何から何までをスマホに頼らずに、「この素晴らしい景色を目に焼き付けておこう」という精神が詩の創作の原動力となり、そして「自分の言葉で」表現することを常に心に置くことで「詩の壁」が取り払われることを期待して授業を終えました。

好奇心と観察力、常識を疑うこと、自分自身で観察し、調べる。これらはいろいろな場面で応用できるのではないかと思いますので是非実践して貰いたいと思います。

2024・12・1

特集 「ひらく」

ものづくりで

松江の未来を

【ひらく】

— 岸本廣美さんの挑戦 —
(松江市)

松江市灘町に位置する飲食店「Glocal space & (アンド)」。
そこで料理を振る舞う店主・岸本廣美さんは、沖縄からIターンで島根に移住。
料理人、地域おこし協力隊、「カラコロ工房」の職員…。
様々な顔を持つ彼女の目に、松江市はどのように映っているのか。
松江のものづくりを支える一人の女性の人生とポリシーに迫った。

田中 結花



二十歳で迎えた人生の転機 癒しの空間とは

岸本さんが多忙の中で【ものづくり】への熱意を持ち続けているルーツは、いったいどこにあるでしょうか。お話を伺うと、そこには価値観さえも変える大きな衝撃と、みずみずしい出会いの物語がありました。



20歳で、愛するふると沖縄を離れ、大阪に出稼ぎに行った岸本さん。3〜4か月の大阪での生活でしたが、そこで都会での生活に自身が不向きであることを感じ始めます。気分を変えようと、遊ぶ場所を探した彼女は、天神橋筋六丁目にある商店街へ足を向けました。その強い活気に衝撃を受け、ふと地元のことを思い出します。賑わいのある商店街が生活圏内に位置しており、彼女もそこへ足しげく通ううちの一人でした。しかし、ある時を境に、そこはシャッター街へと姿を変えることになったのです。その情景を思い出した彼女は、「出稼ぎに来て

いる場合ではない。沖縄に帰らなきゃ」と思うようになります。

また、彼女の人生を変えたもう一つの出会いが。人が楽しくなるようなことができた町は明るくなるのではないかと考えていた岸本さんは、体験工房のアルバイトを見つけてます。その工房には、小さなシーサーを作ったり、サンドアートを作ったりする人々の姿がありました。彼女は、そこで働き始めて強い衝撃を受けます。暗闇のシャッター街の商店街の体験工房で、目をキラキラさせながらものづくりに集中している人たちがいる。その光景は、岸本さん

の心を掴んで離れませんでした。工房が人々にとつて癒しの空間のひとつになりうるのだと感ずるようになります。

度重なる衝撃と出会いを受け、岸本さんは【まちづくり】と【ものづくり】に強い関心を持ち始め、「今後こういう道で生きていきたいな」と思うようになります。



松江との出会い 今すぐ地元に戻りたい!?

岸本さんが松江で生活するようになったきっかけについてお尋ねしました。

この地に興味を持ち始めたきっかけは、30歳で移住した横浜での出会いにありました。それまでも、島根出身の知人から島根の話を聞くことはあった岸本さん。どのような場所であるのかは、つかめずにいました。横浜に移住しハローワークに通い始めた彼女は、担当の職員と仲良くなり、話を聞き始めます。職員は岡山出身で、海が大好きな方でした。

「私の住む岡山を中心に考えたとき、海は島根によく行っていた」という話を聞いた岸本さんは、初めて島根のことを強く意識するようになりました。また、同時期にテレビ番組で奥出雲町の特集を目にし、島根に対する関心をさらに深めていきました。

憧れの島根に移住した岸本さんを待ち受けていたのは、予想外の現実でした。最初の3か月間は、「夜が暗くて歩くのがこわいから外に出たくない」というマイナスなイメージが先行していました。その苦悩は、思わず「もう嫌です…今すぐ地元に戻りたい…」という言葉をこぼ



笑顔でインタビューに応じる岸本さん



“自分のきもち”
ってなんだっけ…？

してしまうほど。しかし、ある日ふと思
います。「私がこれまで住んでいた都会
の地は“いつわり”だったんじゃないかっ
て」と語る彼女。これまでいた場所には
街灯の人工的な光が溢れ、自然の光が差
し込んでいなかったのではないかと思い
始めた彼女は、改めて島根の暮らしを見
つめ始めます。街灯がないことで月明か
りの美しさに魅了され、それで夜道を歩
けることに気づいた岸本さんは、「自分
のきもち“ってなんだっけ…？”と考え
るようになります。仕事に奔走してきた
彼女にとって、立ち止まってじっくり考
えられるような場所に出会ったのは大き
な衝撃であり、人生を180度変えるよ
うな心境の変化だったといえます。

ものづくりと松江 地域が作家に与える活力

「松江はものづくりをする場所として
とても良い」。そう語る岸本さんですが、
そう考えていらっしやる原点とは何なの
でしょうか。尋ねてみると、彼女が思う
“松江のものづくりのしやすさ”につい
てのポイントを三点教えてくださいまし
た。

一点目に挙げられたのは、“自然の中

の余白の多さ”です。町の中心には宍道
湖があり、それがあからこそ空が空間
として存在し、雲の動きがより自由に感
じられます。それに加え自然に緑が多く、
その近隣で暮らす岸本さんは、風景を見
ていると自由な発想が生まれやすいと語
ります。感性を必要とするものづくりに
とって、作り手の心の自由度は大きな鍵
となります。人とふれ合うこと以上に、
自然のものと会話することが、想像を膨
らませるうえで不可欠となるのです。島
根は道も広く、さまざまな面において余
白を感じられると岸本さんは語ります。

二点目は、“四季がある”ところです。





岸本さんの故郷である沖縄は、年中気温が高く、肌感覚で四季を感じるのには難しいといえます。松江は比較的四季がはっきりと分かれる地域であり、気温や情景の変化から季節を感じ取ることが出来ます。その中でも冬はものづくりをする人にとって重要であると語る岸本さん。松江の冬は非常に寒く雨もよく降るため、人々は外出する時間が減ります。それにより、冬は人を休ませる効果を生むとともに、作家を必然的にものづくりに集中させるのです。

最後に挙げたのは、「文化が残っている」ところでした。ものづくりをするうえでは、現在だけではなく、過去も見るのが重要です。作家がデザインを考えるときに必要となってくる、地域の歴史が根強くこの地に残っていること。それがものづくりの環境として非常に大切な要素を占めていると、彼女は心を込めて話してくれました。



当店では、
ランチの際に自分のお気に入りの器をセレクトして食事を楽しむことができます。



**趣味は四つ葉のクローバー探し
岸本さんのマインドを
支えるものとは**

多忙の中、いつも笑顔で接客をし、客が帰るときにはいつも見送りを欠かさない岸本さん。そんな彼女の「前向きさ」、「ひたむきさ」をかたち作るマインドは、どのようなものなのでしょう。

岸本さんの人生において、出会った人とのかわりには、大きな影響を与え続けてきました。「自分じゃできない経験でも、相手とのコミュニケーションを通じて背景を知るきっかけが生まれ、別の世界に行ったような感覚になる」と語る彼女。様々な活動をする人たちに対し、常にフラットに接するようにしています。近所の子供たちも、彼女にとっては友人の一人であり、対等に接する相手です。また、彼女にとつての大きな出来事のひとつとして、ご主人との出会いがあります。同じ地域おこし協力隊に所属する料理人の仲田悠生さんとは、ご夫婦でありながら、互いの夢を語り合う仲です。自分のペースを大切にするととの出会いは、岸本さんの生活や価値観にも、大きな変化を与えました。

「誰かと会話していると、その人と気が合いそうな別の友人の顔が浮かんできて、ついつい二人を会わせちゃいます」と語る岸本さん。誰かと誰かをつなぐのが大好きな彼女の周りには、いつも笑顔の人の姿があります。楽しそうにしている顔が好きだから見届けたいという思いが、忙しい彼女の大きな原動力になっているのだと感じられます。

幸せを探すコツについて、彼女に尋ねました。「笑顔でいることがベース。でも時に、笑顔になれないときの自分について考えます。そうすれば、自分を大切にしようと思えるから」そう話す岸本さんにとつて幸せを感じる瞬間は、四つ葉のクローバーを探しているとき。小さな幸せを抱きしめる彼女は、こんなことを話してくれました。

「幸せのベクトルはとても単純で、言葉のレベルであり、聞く耳の育て方。自分が何をキャッチしたいかで、幸せは変わるもの」

岸本廣美さんの周りには、今日も笑顔が咲いています。

（たなか ゆいか）

※1 カラコロ工房

…松江市殿町にある、松江の食と文化を体感できる複合施設。令和6年10月にリニューアルオープン。



居場所を、ひらく

openspace. 美南

(出雲市)

兵庫 日和

出雲市斐川町の美南という場所に、一軒の風情漂う古民家があります。名前は「openspace. 美南」。貸しスペースとして提供されており、イベントを開催したり、個人でのんびり過ごしたり、利用目的は様々です。一歩足を踏み入れれば感じる、そのどこか懐かしいような感覚は、訪れる人の気持ちを暖かくしてくれます。そんな素敵な空間を作り出したのは、建築設計・環境デザイン事務所の「studio. 美南」さん。ご夫婦で活動されており、今回は奥様の安達佳奈さんにお話を伺いました。



openspace: 美南での活動はいつからになりますか？

だいぶ前になります。独立したいと思って場所を探していて、2018年にこの空き家に出会いました。大家さんがいて、現在も借りている状態です。2019年から借りていて、2021年から設計事務所を始めました。

貸しスペースを始めた理由は何ですか？

「貸しスペースをしたい」が先ではなくて、この場所と出会ったのが最初でした。すごく環境がよくて、建物も古いけれど、残してくださった方の思いとかそういうものを感じて、いろんな人に紹介したいなとまず思いました。その次に広すぎるなって。広いと何を何とか使っていかなきゃと思う、用途について色んな案をあげました。3、4組のカフェとか、服屋さんとか、うつわ屋さんとか、一緒にシェアできたらいいなあと。それで色々考えたけれど最終的に、何かもつというんなことに臨機応変に、目的を固定せずに可能性を探りたいな、と考えました。そう考えたときに、商売とかは置いといて、はじめは、空地とか公園みたいな感覚で利用できる貸しスペースでいいこうと思いました。だからまだ目的を探

している途中ですね。

どんな方が利用されますか？

利用目的は、イベントの開催や、ちよつと一時間友達とお弁当を食べたいという人まで色々あります。そういう「ちよつと貸して〜」っていう気軽な感じが嬉しいです。自分たちの本業はどうしてもせかせかする仕事だから、利用者さんに癒されてますね。



日々の活動記録を毎月ニューズペーパーにまとめておられます。利用目的は、イベントの開催やピラティス教室、コスプレ撮影など本当に様々！！



**初めてこの空き家に来たときは
どのような状態でしたか？**

雑然としている訳でもなく、なんとなく生活感が感じられる状態でした。

ほとんど直してないです。離れは大きく直したんですけど、母屋は畳を変えて、事務室の建具に少しお金をかけたくらいです。借りているので、固定のものにはまだ手を付けていないという状態ですね。

最後に大家さんのおばあちゃんが住んでおられて、20年前に亡くなったのかな。それから親戚中の物が集まってきて…。荷物はすっごいあったんですけど、部屋を片付けたくらいです。

この家はどうやって見つけたんですか？

知り合いから紹介してもらいました。前に勤めていた事務所の所長が出雲の空き家調査をしていて、「ここはどうだ」と紹介してくださいました。雰囲気も良い感じだったし、大家さんもとてもしっかりで、ここに決めました。本当は住もうと思って借りたんですけど、意外と早く独立のタイミングがきてしまったので、できませんでしたね。

建築の世界に入ったきっかけは？

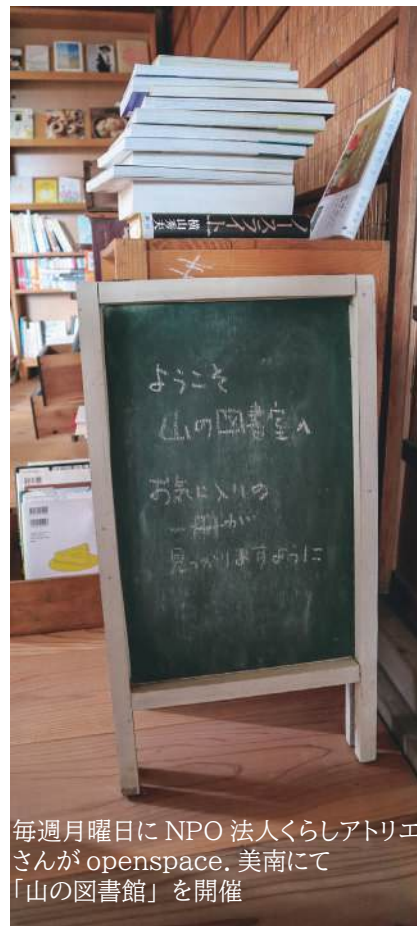
小さい時から、石見銀山とか大森の街並みとかが好きでした。それで、本当はインテリアの仕事がしたかったんですけど、地方だとなかなか仕事がなくて、建築をやらなければいけないよと師匠に言われました。でも、空間を作りたいと前から思っていて、それは建築によることのでき大きいのだと、仕事をしてみて分かったのでやっぱり建築をしてよかったです。

ご夫婦で仕事をする上でいいことはありますか？

うちの場合二人じゃないと無理です。それぞれ、得意分野が違って多分一人だとできないと思います。

設計士って、きちんとした事務であったり、表現力や感性であったりが大事で、どっちかっていうと夫がこっち（事務）で、私がこっち（表現）なんです。二人で相反する感じだから、苦手なところをお願いってできて良いんです。貸しスペースの方はコミュニケーションを取らないといけないんですけど、私がそういうの好きなので担当します。忙しいですが、お客さんがいるとゆっくり喋っちゃって、そのせめぎ合いです。今日は喋っ





毎週月曜日に NPO 法人くらしアトリエ
さんが openspace. 美南にて
「山の図書館」を開催

て終わっちゃたなーってこともあるけど、癒されるので、葛藤があります（笑）。

設計で大切にしていることは何ですか？

お客さんの立場になつて考えることです。現場の方と依頼者の方、両方の間に立つて両方の通訳となれるように意識しています。

あっち（旦那さん）とは違うんですよ。建物つて中の人が変わつていくじゃないですか。そうなるのもっと長いスパンで、俯瞰して考えたいみたいなんですけど、私はそれができなくて。私は、「今のあなたに！」って考え方なので。それで話し合いはしますね、そのどちら辺を狙うかが難しいです。

あと、改修しやすいようにいつも考えています。一つひとつの材料を組んで、バラして、また組んで……、そうやって一軒の家が違う場所でも使われるというのが日本建築の醍醐味だと思っています。だから、改修しやすいようにするとは共通してますね（旦那さんと）。

仕事のやりがいになるのはどんなことでしょうか？

それは、お客さんが幸せそうに暮らしておられることです。

次のお客様のために見学会をするの



で、それで定期検査も兼ねてよく様子を見させていただくんです。そういう時に幸せそうにしておられると、とても嬉しいですね。
本当にお客さんに恵まれていて。やっぱりトラブルとかになるケースも結構知っているから、ありがたいなと思っています。



openspace. 美南の今後について

貸しスペースはどうしようかすごく悩んでいます。自分のライフワークみたいなどころがあるんですけど、設計のペースでもありますし。でも何かに固執して誰かに迷惑かけたり、自分たちが苦しくなったりするのは違うと思うので、悩みながらも可能性を探すことを楽しめたらいいなと思います。

お客さんの弾くヴァイオリンが聞こえる、くらしアトリエさんが事務をしておられる、お客さんが来て話されて、図書室で本を読んでいる人がいる。そんな風に、色んな人がいるのがとても良いなと思って。月曜日はくらしアトリエさんがおられるんですけど、もう一組か二組固定でおられると、人の動きがあつて楽しいし、規模に合っていて良いなと思います。

studio. 美南とつづいて目指していること

事務所はなんとか続けていきたいな。続けるためにはきちんと仕事を取らないといけないんだけど、それよりも一個一個を丁寧に行きたいですね。一軒一軒丁寧にやるとやっぱり時間がかかっちゃうんですけど、増やすとそれだけ手薄になっちゃうって、それは違うなと思うので

…そのせめぎ合いです。だけど、とにかく丁寧にやりながら、続けていきたいですね。

出雲でもこういう風にお家を維持していけばいいのか悩んでおられる方々も多いと思います。倒して更地にして新しい家を建てるのがいけないとかではないんですけど、全部新しいものだけの風景になるのは少し寂しいなと思って。何かもうちよつと違う方法を私たちが提示できたら良いなと思っています。

安達さんのお話を聞く中で、openspace. 美南という場所が多くの人を繋ぎ、ぬくもり溢れる場所であるということが実感できました。また、利用者さんが生き生きと過ごす様子は、安達さん自身にも活気を与えてくれています。場所を提供する者と利用者がお互いに温かい気持ちになれて、感謝し合えるという素敵な関係性は、この場所ならではのものだと感じます。

建物の新たな可能性を見つけ、studio. 美南だけの魅力を与えるその素晴らしい技術と情熱は、安達さんご夫婦の努力や信頼関係の上に成り立つものであることが分かりました。今後もきつと、その建物に関わる全ての人たちを幸せな気持ちにしてくれるに違いありません。

(ひょうご ひより)



島根にダンスの扉を『ひらく』

(松江市)

池田 安寿



今回の取材場所へ

11月18日、私は松江駅から徒歩1分の場所にあるBOBCATダンススタジオを訪れました。車通りも多いその場所には一際大きく目立つ看板が。吸い込まれるように階段を上るとそこには、今回取材をする山本ユミさんの姿がありました。



私は小学校1年生のころからチアリーダーングをやっていたこともあり、踊ることが大好きでBOBCATダンススタジオのことは昔から知っていました。山本さんは何年も前からここ、島根県立大学のダンスの授業も担当されており、私自身授業を通して山本さんにダンスを教えていただいています。先生の熱量のある指導と踊っている姿を見て、心の底からダンスが好き！ということが伝わってくるようでした。そんな姿を毎週見ている中で、山本さんのダンスに対する想いを強く聞きたいと思うようになり取材することを決めました。



ダンスの道へ

前置きが長くなりましたが、今回インタビューさせていただいた山本ユミさんは山陰で幅広く活躍されており、様々な場所でダンスを教えておられます。広島短期大学を卒業してからは松江の旅行会社に約10年勤めておられました。そのため、体を動かすことが好きだった山本さんですが大人になるまでダンスの経験はゼロに等しかったといいます。当時島根でダンスを習っている人は少なくダンスのジャンルもそこまで多くはありませんでした。そんな時ダンスをやっていた知り合いに、当時は大人の社交場であった「ディスコ」に行かないかと声を掛けられ、何度も行っている間にダンスの魅力にのめり込んでいきました。

今でこそ沢山のジャンルが知られていますが、当時はヒップホップやロックンロールなど有名なものではなく、ソールダンスやブレイクダンスを練習していたそうです。人生初めてのダンス披露は3人ダンスを習い始めて間もない頃でしたが人前で踊ることの楽しさを知りました。山本さんのその後のダンス人生においてこの初舞台は忘れられない思い出の一日となりました。



取材の様子

師匠との出会い

そんな中、山本さんのダンス人生を大きく変えたのは海外でも活躍しているTony Teeさんとの出会いでした。Tonyさんはロサンゼルスで指導をしながら日本でもワークショップを開くなどマルチに活躍されている方だったため、山本さんは興味を持ち、福岡や大阪で開催されたワークショップに参加しました。そこから本格的にダンスに打ち込むことを決意し、翌年にはロサンゼルス

スで行われたプロ養成コースに参加を決め、3か月間Tony Tee先生指導のもとダンスを徹底的に叩き込んだといいます。「ダンスだけで生きていく」そう決意したのです。安定している職場を離れ、まだ世の中には浸透していないダンスという道。親には反対されました。しかしその反対を押し切り、バイトをやりながらダンスの活動を続けた山本さん。週に3回公民館でスクールを開き初心者に向けた教室を始めました。



LAダンスプロ養成コース留学時



留学時の同級生

それ以前にスポーツクラブのインストラクターをやっていたこともあり、そこの教え子が興味を持ちダンススクールに通ってくれたのです。当時島根ではダンスが流行っていない状況だったため、誰にでも伝わるように「リズムダンス」と名前を付けていくつかのダンスクラスを作りました。

最初の発表会は1999年頃、週に3回練習した成果を見せるべく西津田会館で発表会の場を設けました。今でこそダンスをやっている子どもたちは多いですが、最初の出演者に子どもはおらず、約10人の大人だけの発表会になったと言います。体育館のような場所で踊ったこともあり、照明や音響も自分たちで行い、ステージを盛り上げました。

松江テルサホールでの発表会



その後は練習場所として使っていた公民館ではなく本格的にスタジオを作ることと決意。指導者である前に踊ることが心の底から大好きな山本さんは、少しでもダンスを踊りたい、上手になりたい、そんな思いからBOBCATダンススタジオを2004年に設立しました。BOBCATダンススタジオは山本さんの師匠であるTony Teeさんが付けられた名前であり、軽やかで速さを持ち味とした山本さんを《ヤマネコ》に例えて名付けられたそうです。授業で山本さんのダンスを見ていると1つ1つの動きにキレがあり、一度見てしまったら目が離せないそんな印象を受けました。鋭くて強いヤマネコのような瞳に吸い寄せられることを考えても、本当にヤマネコという言葉がよく似合うと感じます。



過去を振り返って

最初はインストラクター含め3人で活動開始。チラシを作り、周囲に配ることから始めました。徐々に知名度も上がり出演のオファーが来るなど活動の幅を広げていったBOBCAT。スタジオを設立した翌年からは毎年のように松江テルサで踊る機会も貰ったそうです。数年後には子どもクラスもできて、総勢100人以上いた時代もあったほど人気のダンススクールへと進化を遂げていきます。スクールで教えていた生徒さんも大人になり、自分でスクールを開く方もおられると伺いました。ダンスを通じて山本さんが与えた影響が凄く大きなものだったと感銘を受けたことを覚えています。今ではBOBCAT以外でも米子や出雲に行きダンス指導を行っておられ、他にも市内の小学校、中学校、高校のダンス指導や大学の授業を受け持つなどマルチに活躍されています。



鳥根県立大学



ダンス授業の様子



スターウォーク&パフォーマークラスメンバーとのPV撮影



昨年までは島根スサノオマジックの専属チアリーダー、アキアマジックの指導者も長年にわたり務められるなど、本当に多忙な毎日を送っておられました。山本さん自身、チアダンスというやったことのないジャンルの挑戦でしたが、スサノオマジックがB2だった時代からアキアマジックを支えてこられ、今では誰もが踊れるキャッチーなダンスからヒップホップやジャズなど様々なダンスで会場を魅了しています。アキアマジックの人氣に火が付くまで苦労もたくさんあったと思いますが、山本さんならではのこまめなチアリーディングに注目が集まることはなかっただろうと改めて思いました。



MIYAVI ツアーファイナル

ダンスの魅力

大人になってからダンスを始めた山本さんが思うダンスの魅力、それはダンスをすることでの自己解放ができるということだといえます。山本さんにとってダンスとは何もなくても体一つで楽しめる遊び。本来ダンスに決まりはなく、曲を流して自由に自分を表現することが出来ればそれでいいのです。踊る場所があれば自分のテンションも上がり、人前で踊ることが活性化につながる、そしてまた一歩成長が出来るような気がします。踊っている時こそ自分が一番輝いているときだと聞き、ダンスをやっている私自身も共感することが多くありました。

今山本さんは指導をするうえで「元気・勇気・パワー」という言葉を掲げておられます。ダンスは自己表現をできる最高のスポーツだからこそ練習をしてステージに立つことで自信も生まれてくると思います。実際に子供たちが私生活でも積極的になったり控えめだった子が前に出るようになったり、発表の場があることで前向きになる人が多くなったとうれしいう声も届くようになりました。子どもの成長に親御さんだけでなく山本さん自身もうれしくなるとのこと。発表の場があるということは、それだけ見られるという意識をもって練習をしなければならなし、真剣に取り組まなければいけません。しかし、それを乗り越えた人にはしか見えない景色や達成感がそこにはあります。

す。そこで得た自信や前向きさを掴み取ってほしい、そしてそこで得たことを踏まえてもっと向上心を持って練習してほしい、そんな気持ちで指導を続けておられるようでした。

取材を終えて

今回取材をさせていただく中で、山本さんのダンスが好きという気持ちや常になを目標に挑戦し続けていく姿勢に、ダンスをやっている私自身学ぶことが多くありました。それに指導やプロデュースなどの裏方に回った今でも自分が成長するために努力を惜しまない姿には本当に心を奪われることばかりです。写真を撮らせていただく機会もありましたが、どんな瞬間を切り取っても体がぶれることなく常に心の底からダンスを楽しむ山本さんの姿は、まさに野原を駆け回るヤマネコそのものだったように感じました。

今後、ダンスクラスを充実させるとともに指導とは別で、大好きなダンスをもう一度やっていきたいと言っておられた山本さん。自分が今まで吸収してきたことを発信してもっとダンスを広めていきたい、そんな強い思いを感じ取ることができました。1年後、5年後、10年後の未来など誰にもわかりませんが、BOCATや山本さんの更なる進化を期待

していきたいです。

(いけだ あんじゅ)



心をひらく動物園

だいふく

（松江市乃木福富町）

ぴーたー

井谷桃子



ポニーの森の入り口にあるトレーラーハウス

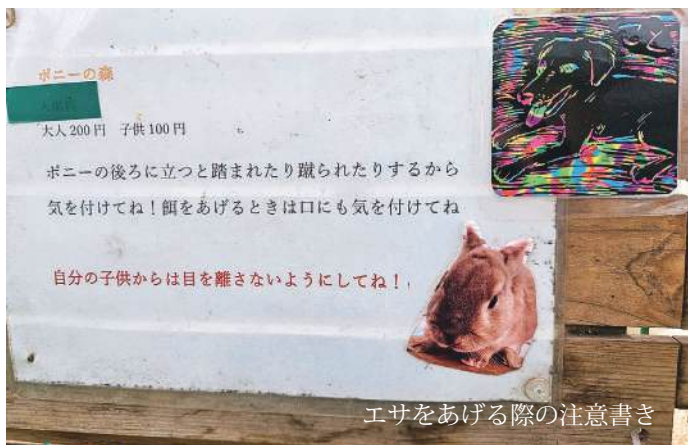


ポニーのサクラとミニチュアホースのちゃめ

ポニーの森

11月18日月曜日、筆者は松江市乃木福富町にあるポニーの森へと取材に向かいました。

細い道路を進んだ先には手作り感満載の小さな動物園がありました。駐車場に車を止め、動物園の入り口にあるトレーラーハウスのそばに行くと、代表の吾郷敬子さんが中から出迎えてくれました。このポニーの森は吾郷さんがおひとりで運営されており、ポニー、ミニチュアホース、ヤギ、ウサギ、モルモット、犬、ハリネズミなどの動物がいます。ふれあい料は子供100円、大人200円で餌代込みとなっています。餌はもらった分の





餌が無くなればおかわりができます。松江に來たのは6年前で、それ以前は安来で9年間運営しておられました。

動物たちのお世話は吾郷さんのほかに、ポランティアスタッフさんが行っているそうです。吾郷さんのお話によると、スタッフの方々は、もともとポニーの森へ動物を見に来たお客さんだとのこと。動物たちとふれあうことで、一緒にお世話をしたいという気持ちが芽生え、スタッフとなる人が多いといいます。ポランティアの方々は松江や出雲、安来などから来られていて、若い方が多いそうです。



ポニーの森を始めたきつかけを吾郷さんにお聞きしました。きつかけは、安来で働いていた吾郷さんへの連絡でした。吾郷さんのご両親が病気になって倒れてしまい、介護をすることになったそうです。その時、吾郷さんは就職していましたが、両親の介護のため退職し、安来から両親がいる東出雲に行くことになりました。その際、吾郷さんはこの出来事に対して、何か新しいことを始めると言われていると感じていました。また、その出来事と同じ時期に吾郷さんの友人も心の不調を抱えており、相談を受けていたそうです。その友人を何とか助けたいという思いと、新しいことを始めると

きつかけ



ランチュウもいます

いう思いから、セラピーについて調べ始めました。調べていくと、「アニマルセラピー」というものがあり、「ホースセラピー」という種類のセラピーがあることを知り、そこからポニー頭とともに安来で「ポニーの森」を始めたそうです。吾郷さんはアニマルセラピーと並行して、チャイルドカウンセラー、家族療法カウンセラーとしても活動をされており、様々な人にカウンセリングを行っておられます。吾郷さんがカウンセリングを行う際、「何でも聞いて」という気持ちでお話を聞くそうです。気持ちが悪くならず、うまく言えなくても、話してい



くことで気持ちがすっきりすることもあるとおっしゃっていました。カウンセリングのあとは、動物園で動物のお世話を行います。フンの掃除やブラッシングなどをするので気持ちを切り替えることができ、気持ちの安定に繋がると言います。吾郷さんはこれまで安来で10組、松江で10組の方々をカウンセリングしてこられたそうで、子供にも行いますが、思ったより大人が多いとおっしゃっていました。こうしてカウンセリングやふれあい体験を行った人が、家族や友人などにこの動物園を紹介することがあるそうです。

ポニーの森の動物たち

ポニーの森にいる動物たちについて伺ったところ、この動物園にいる動物たちの3分の1は、様々な原因で飼えなくなってしまった人から引き取った子が多いそうです。ポニーの森では、動物たちはみんな、お客さんたちが名付けるそう。今年の8月に生まれたウサギの子供にはお客さんたちが考えた「ポポ」と「びの」とお母さんの「ハミイ」から一文字ずつ取って「ぽびい」と名付けられました。動物園の動物をお客さんが引き取るこ



ウサギたちのいる
手作りのケージ





もできるそうで、予約が3人以上になれば繁殖を行うそうです。

トレーラーハウスの中にはアルビノのウサギとハリネズミ、吾郷さんがイベントで出会ったお客さんや動物園に来られる方からのイラストや手作りの小物などが置かれていました。吾郷さんによると、長机や子供用の椅子、クッキー、ストラップ、ウサギやモルモットのご飯皿などは、



お客さんからのメッセージカード



お手伝いに来られるスタッフの方々を作られたものだそうです、様々な物を作ることでできるスタッフさんたちに驚きました。そのほかに、おもちゃを引き取ってきれいにしたい欲しい人がいればあげたり売ったりしているそうです。



動物園のイベント

イベントについて伺ったところ、春と秋が多く、6回ずつあるそうです。イベントに出張するのは吾郷さんとスタッフの方が数名必要だそうで、当日に来られないことがあると大変なので、しっかりと来てもらえる人を探すのが大変だとの



エサやりの様子

こと。イベントに行くと、動物とふれあったお客さんたちの笑顔が増えることがうれしいと言っておられました。また、学校で動物を飼うことが無くなり、動物とふれあう機会を増やすことで動物のことを知ってもらうことができるともおっしゃいます。

ポニーの森でもイベントを行っているそうで、手作りの看板や毛糸を使った立体的な小物づくり、お話の会やパン作りなど様々で、子供や大人と一緒に楽しめる内容になっていて、どんな内容にするのかは、スタッフの方が相談して決めるとのことでした。



ポニーの森に来られるお客さん

動物園のお客さんはどんな人が多いか聞いたところ、家族連れや観光で来た人が多いそうで、家族連れは近くに遊ぶところがなかったため来たという方が多く、観光ではマップに出てきて気になったため来たという人もいたといいます。平日には近くの福祉施設からのお客さんが多いそうです。吾郷さんによると、動物園で動物とふれあうことは特にお年寄りに良いそうです。吾郷さんのお話では、その方はご老人で老人ホームにおられる方

で、老人性の鬱のような感じで、あまりしゃべらない人だったそう。ポニーの森には動物たちとのふれあいを目的に来られ、動物とふれあっていたうちに、だんだんと昔のことを思い出したそうで、自身が飼っていた動物のことや子育てをしていたころのことを話してくれたといいます。そのお話をしている時のご老人の目は、まっすぐ前を見ており、来た時と比べ物にならないほど元気になっており、その光景を見て、吾郷さんもお迎えに来た施設の方も驚いていたとのことでした。



ウサギやモルモットが好むビワの枝

運営について

ポニーの森ではふれあい料が子供100円、大人200円という値段設定になっており、運営ができるのか気になり質問したところ、ふれあい料だけでは運営は行えないと言われました。どうやって動物園を維持するかを考えておられ、現在はイベント出張での出張料やお客さんが持つてきてくれる餌、動物園の周りに生えているカズラやビワの木を刈って餌にしたりしているそうです。動物たちの食性が異なるため、食べられるものか食べられないものかを判断し分けるのが大変だと言います。カウンセリングは行っているものの、料金は受け取っていない状態だといいます。理由を聞いたところ、カウンセリングを受ける人の心の安定を第一に考えておられ、無理にお金を取ることはできないと言われ



ビワの葉

ました。また、後継者についても、ボランティアのスタッフさんとうまくやるか悩んでおられるとのことでした。



取材を終えて

この授業でポニーの森という動物園があることを知り、取材をしていくにつれ、ポニーの森が好きになっていきました。吾郷さんの明るい性格や動物たちの人懐こさや可愛さがこの動物園に来るお客さんやイベントに来るお客さんの心を開き、明るくさせてくれることでまた来たいと思います。餌を持って再訪するのではないかと思います。また、動物たちも吾郷さんやお客さんに心を開いているように感じました。

(いたに ももこ)

「食」をひらく

(松江市)



みなさんは3大アレルゲンとは何か知っていますか？
3大アレルゲンとは、卵、牛乳、小麦粉のことです。
今回は、そんな3大アレルゲンフリーのおやつを販売している
「おやつものがたり Hoppe」へ取材に行きました。



今村 萌伽

「お店を発見」

11月29日、風が強く吹いていて、寒さに耐えながら目的地まで歩いていると、真っ白な壁が目印の「おやつもの」がたりHoppe」が見えてきました。お店の看板は物語にちなんで、見開きの本のようになっています。扉を開けると、犬の足跡がお店の中まで案内してくれました。お店の扉を開くと、暖かい色の照明

がショーケースに並べられている、色とりどりの洋菓子とおやつを照らしています。そんな洋菓子を作っておられるのが、今回お話を伺った眞田加帆里（サナダカオリ）さんです。「おやつもの」がたりHoppe」は、2023年の12月にオープンし、卵・乳製品・小麦粉の3大アレルギーを使用しないカフェです。アレルギーを持つ方や、健康志向の方など、食の多様性を大切にしてもらいました。



むかしながらの時計や星の王子様などの本



ショーケースに並べられたスイーツ

「おやつものがたり hope のはじまり」

眞田さんは、出雲出身で、調理師学校卒業後、障がいのある方たちと一緒に働くようなカフェやお弁当屋さんを経験されました。結婚後は、松江の県立大学近くにある「カフェブラウン」で働いていたそうです。その後、現在伊勢宮でワインバーを経営されている旦那さんがバーを開く前にウエディングの料理長をしておられた頃、大勢の人の会食では、何人かはアレルギーを持っている人がいて、料理一つ作るのにも大変気を使っていたのを覚えておられました。そのことから、アレルギーのことを意識するようになり、「ご飯じゃなくて、おやつの方がアレルギーで困っている人が喜ぶんじゃないか」と、お店を開くきっかけになったそうです。

「お店をひらいてみえてきたこと」

旦那さんと2人のお子さんの4人家族の眞田さんは、家族全員アレルギーもない健康体なんです。お店を開くにあたって、「アレルギーは最近増えている」という漠然とした情報しか持っていないでした。アレルギーにもいろいろな形があり、アレルギーを持っている子に食べさせたいという思いで始めたものの、実際のどのくらいいるんだろうという不安な思いを持ちながらお店をやっていたそうです。しかし、お店を開いて聞かえてきたのは、「こういうお店待ってたんです」「まさか山陰にこういうところがあるなんて」という声でした。実際、卵、乳製品、小麦粉が食べられないお子さんも多く、逆に大人でも、コロナの影響などで小麦粉が食べられなくなったという方もいるそうです。アレルギーが当たり前で、アレルギーと共に20歳まで、成長された男性の方が来られた時は、「小さい時にこういうのがあったらよかったな。自分は（食べられるものが）無いのが当たり前前の生活をしているけど、やっぱり、普通に何にも気にせず食べられるのっていいよね」と話されたそう。それ

を聞くとお店を開いてよかったと思うとおっしゃいます。



左：「おやつものがたり Hoppe」 眞田加帆里さん



「心の健康」の大切さ

3 大アレルギー除去のケーキ屋さん1号店になって良かったと思う反面、時代がまだまだ追いついてきていない感じがする、と眞田さんはいいます。コロナの影響もあり、健康意識が上がってきていますが、都会の消費者ほど意識が追いついていないというのも現実です。グルテンフリーのお店やアレルギー除去のお店をひらくということは、イコール全部無添加、健康的なお菓子という風にとらえている人も実際にはいるそうです。眞田さんは、『これが健康』みたいなものって実際分らないじゃないですか。だから、体の健康というより、心の健康を大切にしているんです」といいます。眞田さんの思う心の健康とは、「これが食べたい！」と思ったとき「卵入っているから駄目だよ。これしか食べられないよ」と気持ちの面で、嫌な思いを心に残すのではなく、ショーケースを目の前にして、自分の気に入ったものを選ぶこと。アレルギーをもっている子どもからすると、小さなことでも、思い出になって、心の健康につながるんじゃないかとおっしゃいます。

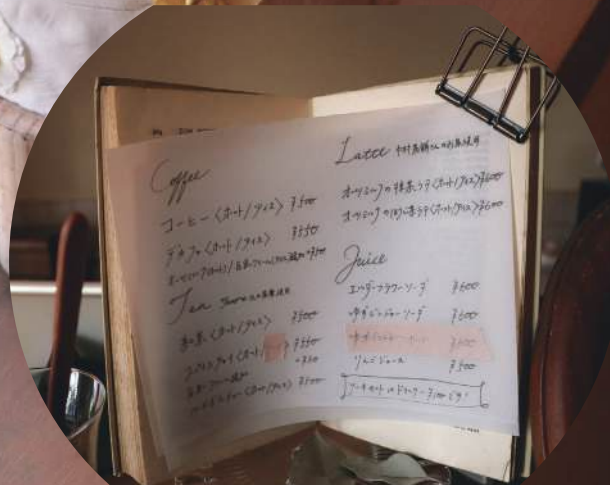


「お店を利用している人の声」

松江市在住のみちこさんは、お子さんが、卵、乳製品のアレルギーをもっておられます。お子さんの小さいときにはまだ、アレルギー除去の商品が出回っておらず、誕生日ケーキやパンなど手探りで一から手作りで作っていたそうです。そんな中、近年、アレルギー除去の商品やグルテンフリーのお店が山陰に増えていることをとてもうれしそうにお話されました。「アレルギーがあっても安心して食べられるということがうれしかった。ケーキが並んでいるショーケースから選ばせてあげる体験を子どもたちにさせてもらえたことにとても感謝している。豆乳臭くなく、アレルギーがあっても、なくても、美味しく食べられる優しい味でした」と、喜んでおられました。

新型コロナウイルスの影響により、近年、食への関心が高まっています。そんな中、アレルギーという言葉はまだまだ、理解や認識が追いついていないんだなと今回の取材で知ることができました。体の健康だけでなく、心の健康を大切にしておられる「おやつものがたり Hoppe」さんは今日もお店を開いて、笑顔あふれるお菓子やケーキを作っています。

(いまむら もか)



眞田さんのお子さんが作られたワインのコルクを使ったクリスマスツリー

障がい者と社会・人と本を結ぶ

(松江市)



大町壮真

朝からの強い雨でより冬の寒さを感じる11月28日。筆者は、松江市北堀町にある特定非営利活動法人プロジェクトゆうあいを訪ねました。

今回、インタビューに応じてくださったのは井川貴博さんで、普段は「ゆうあい」の古本のリサイクル事業に関わっていらつしやいます。

【特定非営利活動法人

プロジェクトゆうあいの歴史】

「特定非営利活動法人プロジェクトゆうあい」の成り立ちは、2004年に島根の高度情報化を推進するグループ「プロジェクト23」、まちのバリアフリー情報を発信する「島根ユニバーサルデザイン研究会」の有志により設立されました。当時の事務所は松江市白潟本町で、最初の事業は松江のバリアフリーマップを作るといふ事業だったそうです。

2011年に、現在ゆうあいビルのある北堀町に移転。また、放課後デイサービス事業の「第1キッズゆうあい」を開所。この第1キッズゆうあいは小学生が中心で、ゆうあいビル2階のフロアを利用しています。放課後デイサービス事業では、障がいのある子供の余暇（放課後、

学校振替休日、夏休み、冬休み、春休み等）

活動の支援として、様々な生活体験・社会体験・学習の機会を提供しており、そのための送迎サービス（学校から事業所、事業所から自宅）も行っているそうです。

プロジェクトゆうあいでは、2012年に障がい者継続就労支援事業A・Bも開始されました。

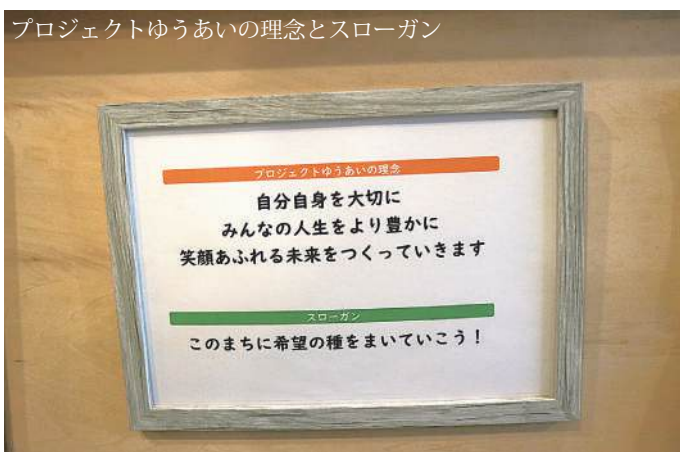
雇用型の就労継続支援A型事業、非雇用型の就労継続支援B型事業と分けており、一般企業への就労を目指す就労移行支援事業も2019年から運営しています。

この就労支援事業B型で一定期間以上勤務された方のステップアップが就労A型にあたります。

この就労支援事業A・Bには、今回取材した古本のリサイクル事業、ゆうあい独自の刊行物の発行、パソコンのリサイクル事業など、多岐にわたる事業が含まれます。

2013年には「第2ジュニアゆうあい」が開所されました。

この事業は、前述した「第1キッズゆうあい」と同じく放課後デイサービス事業です。



◀井川さん(左)と筆者(右)

ただし、中高生が中心の事業で、建物は2階建ての住宅を活用しています。場所はゆうあいビルのある通りの少し奥まった場所にあります。また、後述する「第4ジュニアゆうあい」がはす向かいに位置しています。場所は、ゆうあいさんのホームページに分かりやすく載っているのぜひ確認してみてください。

2014年には「第3キッズゆうあい」を開所。こちらも放課後デイサービス事業で、小学生が中心の事業ですが、事業所が楽山公園の西にあり、他の放課後デイサービス事業所よりも離れた位置にあります。建物は平屋で、庭も広く、歩いて10分ほどの位置にみしまや学園店があります。

2015年に引きこもり等の若者支援の場として古本屋「本町堂」を開店。この事業では、学校に行きづらい、働く場所を探している、やりたいことを見つけない、という若者（15才～39才が対象）を一般就労につなげるための訓練の場として運営していて、主に本の手入れや書棚整理、接客などの仕事を通じて、社会に一步踏み出すためのお手伝いをされているそうです。利用の際には利用登録が必要ですが、店内にはくつろげるスペースもあり、読書などの居場所としても利用されているようです。

また、同年に前述した障がい者就労移

行支援事業も開始しました。この事業では、就労支援A型・B型とは違い一般企業へ就職を希望している障がい者のため、就職に必要なスキルを身につけるサポートをしています。

2017年に「PCエコステーションゆうあい」を開所。この事業では、廃棄されてしまうパソコン等の電子機器を分解したり、パソコンの整備や解体などの作業を行っています。PCドック24松江店としても営業しており、パソコンの修理も行っているそうです。

2018年に「第4ジュニアゆうあい」を開所。こちらは、「第2ジュニアゆうあい」のはす向かいにある二階建ての住宅を利用しています。「第2ジュニアゆうあい」と殆ど同じ設備となっていて、事業所説明によると「第2ジュニアゆうあい」の子と卓球の腕を競っているそうです。

2019年に「第2プロジェクトゆうあい」を開所。この際に、「第1プロジェクトゆうあい」では就労支援事業A型と就労移行支援事業を扱い、「第2プロジェクトゆうあい」では就労支援事業B型を扱うようになりました。

2021年に「相談支援事業所ゆうあい」を開所。この事業所は、障がいのある方とその家族を対象とする相談窓口で、相談支援専門員が障がいのある方や



▼▲おんぼらとステーション内の様子



おんぼらとステーションで販売されていた商品▲

そのご家族から相談を受け、様々な情報の提供や、助言及び福祉サービスを受けるための手続き等をお手伝いしているようです。

同年に「地域活動センターゆうあい」も開所。こちらは『おんぼらとステーション北堀』という名前で、カフェを営





▲販売されていた古本▶



▼おんぼらとステーション内の様子



業している事業になります。コロナ禍の時期はゆうあいの利用者の方限定だったのですが、現在では登録さえすればいつでも来ていいという場所になっているそうです。井川さんによると月に1回程度コーヒーを淹れる方をお呼びしてブックカフェを行っているそうです。今回の取材では、こちらでお話を聞かせていただきました。

今回の取材させていただいた古本のクリーニング事業とは、寄付してもらった古本を、クリーニングして販売する事業です。

この事業では、古本を主にインターネットで販売しているそうで、「ゆうあい」という一括りで売っているのではなく、全国のいろいろな事業所から古本を集め、販売している「いちよう企画」さんという所があり、そこから古本を販売しているとのこと。

他にも、みしまやなどの地域のスーパーマーケットでも、本棚を設置させてもらい、販売しているそう。井川さんによると、本棚の自作にも挑戦しているんだとか。

また、松江テルサー1階にて、毎週月曜日に本を売りに行っているそうです。ここでも本棚を常設させてもらい、販売しています。この松江テルサーでの販売事業は、「福祉ネットだんだんネ」というグループが運営していて、ゆうあいさんはそのグループに参加して販売しているとのこと。

イベントと呼ばれて販売することもあると井川さんはおっしゃっていました。

【古本のクリーニングでは

どのような作業を行うのか】

古本のクリーニングはどのような作業をしているのか、井川さんにうかがいました。



◀どの種類の本をどの順番で作業するのかの仕分け作業所

井川さんによるとクリーニングする作業としては、「本の表紙の汚れを落とす」、「アルコール消毒」、「本の背の部分の汚れ取り」、「本の中に何か書き込みが無いかのチェック」、があるそうです。

本の背の部分の汚れ取りでは、経年劣化によって茶色く変色した本の背の部分等をやすりで削るなどして綺麗にした後、書き込みが無いかのチェックで鉛筆による書き込みがあれば消しゴムでしっかりと消したりなどするとか。さらに、カバーが少し破れている場合は補修して

分らないようにしたり、値段のシールが貼ってある場合にはシールはがして綺麗にしたりするなど、ただ単に古本を売るのではなく、なるべく直したり綺麗に



基本的にはどのような本、雑誌でも引き取ってくださるそうなので、不要な本を寄付してみたいかがでしょうか。

Amazonに出品する際の入力フォームを紙でも作り、出品する際も職員によってダブルチェックをしているとのこと。他にも、スパーに持っている本を入れるBOXに分別するなど、様々な作業があります。

したりしてから販売しているそうです。クリーニング前に、どの種類の本をどの順番でクリーニングするのか確認し、出来上がった本を文庫本や単行本、新書などに分別する作業を行うそう。



古本を売る時に、どんな値段で売っているのか聞いてみました。値段は基本的にAmazonで売っている最も安い値段を参考にしたり、他の古書店の価格を参考にしたり、ネットとに比べて値段を調べたりするそうですが、インターネットにも情報が無い本は、いくらでも良いよ！という感じで売れることもあると井川さんはおっしゃっていました。しかし、古本が売れた時の利益がゆうあいの利用者さんの収入につ

【扱っている古本について】



▼ 50円で販売されていた本



ながるので、なるべく高く売りたいな
という気持ちもあるので、値段の設定は
難しいそうです。

他にも、売れそうだからと値段を上げ
たり、表紙は綺麗でも中に書き込みや折
り目があるものなどは50円で売ったりす



◀ジャンル分けされてしまわれた本



ることがあるとおっしゃっていました。

古本事業では様々なジャンルの本を販
売しているそうで、どのジャンルでもま
んべんなく売れるそう。もしかしたら探
していた本があるかもしれないですね。

ゆうあいさんでは1日に何冊くらいの
本をクリーニングするの聞いてみまし
た。

井川さんによると、ゆうあいの利用者
さんが大体1人あたり1日最大5.5時間ほ
ど働き、50〜60冊程度クリーニングする
そうです。1日6、7人程度の利用者の
方がいるため、かなりの数が出来上がる



ようです。ただ、出来上がった本の中に
はもう一度清掃が必要になる本もあるた
め、単純計算で出来上がる数よりは少な
くなるのではないかとおっしゃってい
ました。

【ゆうあいの他の事業との繋がり】

他の事業とのつながりとして、クリー
ニングされた古本の中に販売したいもの
があれば、本町堂の方が持っていける
こともあるそうです。

他にも、ゆうあいさんが運営している
子供の余暇活動支援の一環として、ク
リーニングした漫画本を持っていった
り、夏休みなどに古本のクリーニング事
業で行う作業の体験をしたりしているそ
うです。

【まとめ】

今回、井川さんにお話を聞いたり、自
分でゆうあいについて調べたりしてみ
て、「特定非営利活動法人プロジェクト
ゆうあい」が、多種多様な事業で多くの
方の支援をしているのだと知りました。
また、障がい者と社会を結びつけるだ
けでなく、自分にとっていない本を寄

付するだけで、その本を求めている人に
届く。そんなつながりもある事業だと感
じました。年末の大掃除や、引越しま
いらぬ本が出てきた時には寄付してみ
るのはいかがでしょうか。

(おおまち そうま)



食文化をひらく

(出雲市)

優しいピンク色をしている豆乳。想像できますか？
そんな珍しい大豆のお話を伺うべく、ひだまりのおと第6号の
テーマ「ひらく」にちなんで、これからの島根県、いや、
全国の新たな食文化をひらいていくであろう mamenino さんを
取材しました。お店のロゴにもなっていて、商品の9割以上に
使われているという大豆の秘密に迫ります。

石原
律都



11月25日、出雲市斐川町にある「食事にもなるおやつ」のテイクアウト専門店「manenino」さんを訪ね、取材させていただきました。

周り一面田んぼに囲まれ、細い道を通った先にある自然豊かな地でお店をひらいておられました。お店は母の堀内由紀子さんと娘の堀内佳乃さんの親子二人で営んでおられます。優しく温かい雰囲気店内にはほんのりとお菓子の香りがしています。



どうして赤大豆に着目したのか

佳乃さんはもともと大豆そのものに注目していて、赤大豆はその中の一つだったそうです。日本・世界を問わず、人間はたんばく質を動物性のものから摂取している状況が加速しており、それは地球にとつて負担になっていることは紛れもない事実。この今の動物性の食べ物を食べ過ぎていく状況をどうやって少しずつでも変えていけるか考えた時に、一部を植物性に置き換えていくのが理想だと思いつき、大豆でとれるたんばく質に着目したそうです。

そこで、由紀子さんの意見として、見た目から注目してもらいやすいし興味を持ってもらえそうな魅力を持つ題材として使用することになったのが、赤大豆でした。普通の大豆の白と赤大豆の赤を対比させることができるのではないかと、縁起のいいと言われる紅白と出雲の縁結びとを絡めて広めていくことも思いついたそうです。

佳乃さんは「前提として大豆にもっと興味をもってほしい。だからこそ慣れ親しんだ白い大豆よりも目を引く赤大豆を！いずれは島根の地域全体をナチュラルな方法で赤大豆を使って盛り上げたい！」と語っておられました。



商品開発、試作の流れ

おいしいって思ってもらうことが絶対条件で、ひたすら毎日コツコツ試行錯誤されている堀内さん親子。自分の体にとつても地球にとつても、毎日食べても負担のないものを。使う材料の生産方法にまでこだわって、自分たちの足で運べるところ、島根県内などでやってもらえる生産者さんに直接話を聞きに行き、納得できるものを使って作るようにしているそう。実際は失敗して食べてを繰り返しておられるそうです。

商品の9割以上に色んな形で大豆を使っており、蒸し豆にしてペーストにしたり、豆乳にしたり、きな粉だったり形はさまざま。豆そのものとしてよりも材料として使うようにしているそうですが、レシピが世の中にあまりなく、ほとんどは一から直感に頼る部分もあるし、もちろん失敗することもあるそうです。

作っている途中で出た端切れも売れ残った商品も試作も、失敗したものでもさえも、一度も捨てたことはないといいます。このルールは店を構えてから破ったことはないし、そのことが負担にならないものを作るように意識しておられるとのことでした。基本的には甘さは控えめ、オイルも限りなく減らし、前述のとおり材料も無農薬・無添加物で作られたものを、とおっしゃっていました。

この場所で店を構える理由

最初はもつと人気の多い出雲市内のテナントに入ることも考えたし、様々な空き家も探してはみたものの、決め手はと言うと「直感……！」山も見えるし空も見えるし景色がよくて開けたこの場所を気に入っているそう。お客さんにとっては決して便利な場所ではないけど、この自然に囲まれている感じも意外と好評だそうです。お店のイメージとして「カフェ」

となるとグループで来られてお話をその空間で楽しむ感覚。「テイクアウト」となると回転もいいし、改装費用にそんなにお金をかけられなかったこともあるけれど、少しずつ来てくれたお客様に話を聞いてみたり、こちらから材料のお話してみたりといったちようどいいコミュニケーションが取れるところも魅力だと語っておられました。

栽培

大豆自体、そんなに昔から育ててきたわけではなく、今年で3、4回目くらいの栽培歴だそうです。素人ではじめてもそれなりにうまくできたとおっしゃっていました。

いったん草を刈って種を植えたら、そのままほとんど手入れをされていないそう。一般的な農業の工程の中で「土を耕す」ことからはじめますが、実はそれによって生態系を壊してしまう。naneninoさんがあまり作物づくりに手をかけないのも土の健康を考えてのことだとおっしゃっていました。



赤大豆の畑の様子



大豆を作ることで、その土の環境は次に育てる作物にもいい影響を与えるそうです。夏にはお客さんに赤大豆の種を配っていて、みんながみんな農業に詳しいわけじゃないけれど、実体験としてそんなに手をかけなくても育つことを伝えられるとのこと。種を配ることで、作物を育てる第一歩を踏み出す勇気を与えていращしゃるのではないでしょううか。



店内の様子

留学

佳乃さんは、大学のプログラムで一月ほどハワイに留学されていたそうです。ホームステイ先の家庭が外にたくさん連れ出してくれて、ご飯も毎日作ってくれてとても協力的で恵まれていい経験になったとおっしゃっていました。2回目にカナダのバンクーバーでのホームステイを経て、1回目とはまた違う経験を通して、ワーキングホリデーで1年間過ごすごことを決意。職場が多国籍で刺激があつて楽しかった、と話してくださいました。



しかし、途中で新型コロナウイルスが流行。前半の半年間は割と自由に動いていたものの、残りの半年は隔離生活を送ることになった、とのこと。お仕事はカジュアルなお食事屋さんで、そこで使っていた食材もオーナーがこだわっており、オーガニックな食べ物に触れる機会でもあったそう。「自分の味覚は足を運べば運ぶほど広がる」と言っておられました。いろいろなスパイスを買って料理してみるなど、挑戦するきっかけになってそれもそれでなかなかできない経験ができてよかったとのことでした。今のmaneninoさんがあるのも留学の経験を経て、味覚が広がり、オーガニック食材などにも興味を持ったことが大きく関わっているのではないのでしょうか。

mamenino さんの名前の由来

mamenino は「まめにの〜」という出雲地方の方言からきていて「元気にやっつけていきましょうね〜・お元気で〜」というニュアンスの言葉だそうです。mamenino さんがみんなに元気のお裾分けをできたら、地域の盛り上げの手助けができれば、という願いを込めて名付けられたとインスタグラムに書かれています。



左から佳乃さん・筆者・今村さん



さらに、mamenino さんの食材となる「赤大豆」、赤大豆↓大豆↓豆↓mame となります。出雲愛と豆愛が掛け合わせられて生まれたことが名前の由来かどうか。

お店のロゴマークの三粒の豆にはそれぞれ「Love」・「Peace」・「Gratitude」の3つの意味が込められているそうです。





ショウケースの様子



左から、佳乃さん・筆者・今村さん・由紀子さん

今後について

もう少し色々なお客さんに気にしてもらいたい。自分の食事から、体のためでももちろんあるけど、地球についても考えていけるように皆さんなってほしい。一つひとつ買い物をするときにも食べ物を選ぶときにも真剣に考えられるように発信していきたいし、店先で伝えられたらなど。家庭菜園などにも興味を持つてもらえれば、とおっしゃっていました。

(いしはりりつ)



空山を開拓いた人びと

(松江市)

山根 繁樹

「開拓」。それは、遠いどこかで、ずっと昔に行われたこと、という感じがしませんが。しかし、およそ80年前の松江でも、森を切り拓き、井戸を掘り、家を建てて畑を造った人々がいました。そうやってできたのが「空山」地区。その開拓者の一人が、故遠藤恭一さんです。今回、恭一さんのご長男遠藤清美さんに、恭一さんの開拓についてうかがいました。

戦後開拓

1922（大正11）年生まれの遠藤恭一さんは、松江の隣、大東町の町なかで生まれ育ち、会社員をしているとき軍に召集されました。戦争中は台湾で過ごし、敗戦後復員して大東に戻ります。そして、家を継ぐ必要のなかった恭一さんは、敗戦の翌年の1946（昭和21）年、いわゆる「戦後開拓」に応募して忌部の森に入りました。「戦後開拓」とは、アジア太平洋戦争後、国が推し進めた開拓事業で、食糧増産、復員軍人・海外引き揚げ者・戦災者の就業確保を目的として、全国的に展開されています。松江市でも忌部の山中が指定され、開拓者を募っていたのだそうです。これに応募した恭一さんは、一人で森に入りました。安価で土地が提供され、借入金も長期償還でしたが、何のインフラも整備されていない土地に入ることは、大変な苦勞を伴ったは

説明をしてくださる
遠藤清美さん



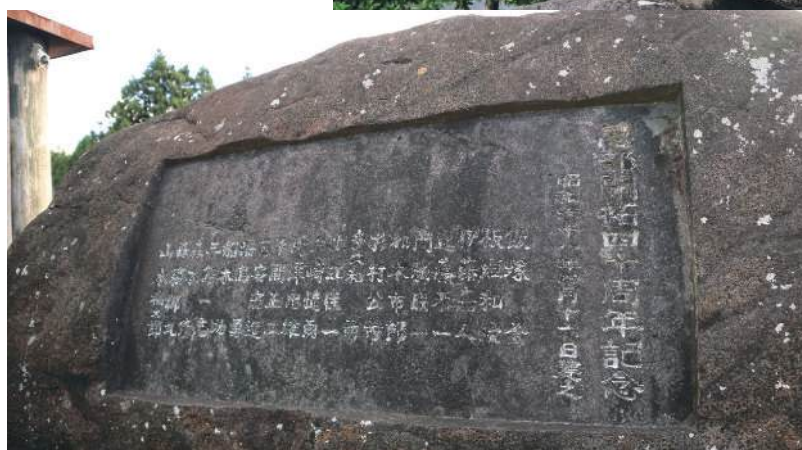
開拓地での生産

そうやって造りあげた土地で、野菜の生産や茶畑の整備をしながら、恭一さんは樹木の苗を生産するようになります。戦中から戦後にかけて、日本では大量の木材需要があり、森林の伐採が進んだそうです。このため、戦後の森林は荒廃し、台風等による大規模な山地災害や水害の誘因ともなりました。これに対処すべく、公共事業で造林未済地を解消する方策が進められたのです。恭一さんは、このような社会の動きの中で、植林のための杉、松、檜などの苗を育て、出荷していたということです。ただ、当初全国的に低調だった苗木生産は、1960年代に入ると一気に広がり過剰気味になったようです。一方、安い外材の輸入により、国産の木材の需要が減り、林業自体も勢いが衰えていきます。

ずだと清美さんはおっしゃいます。また、たとえば明治期の北海道開拓について、集団で北海道に渡り協力して開拓を行い、元いた場所にちなんだ地名をつける、といったことをイメージされる方も多いと思います。しかし、忌部の戦後開拓はそんなイメージとはかけ離れていました。清美さん曰く、忌部の開拓は横の繋がりのない人たちがバラバラに入り、それぞれに開拓していった、とのこと。恭一さんも一人で森を切り開き、自身の生活の基盤を自身の手で造りあげていったのです。その後結婚された恭一さんは、夫婦で開拓を続け、畑と山林3・5ヘクタールを得たのです。

時代の変化に対応すべく、恭一さんは1965（昭和40）年を過ぎてから、酪農に移行します。ちょうどその頃から空山区では、1980年代にかけて、20軒あまりの農家で空山区だけの農業協同組合を組織し、協同選果場も整備していました。当時の目玉商品はトマト。松江の市場に出荷され、良い値段がついたそうです。一方、恭一さんは、トマトも作りつつ、3頭の乳牛から酪農を始め、

その後北海道から5頭のホルスタインを購入して、最大8頭で生乳を卸し始めます。大東の業者に卸していたのですが、当時の空山地区の道は舗装もされておらず、雨が降ると川になります。大東まで生乳を届けるのは困難です。そこで恭一さんは、農場から才ノ峠（忌部と大東の境の峠）までパイプラインを敷設しました。峠まで来た業者は、パイプライン



で送られた生乳を、一缶30リットルほど入る牛乳瓶型タンクに詰め、運んでいったのです。恭一さんの決断力と行動力には目を見張るものがありますが、そもそも開拓で自分の人生を切り拓こうとしたこと自体に、それは表れているというべ

きかもしれません。

しかし、酪農は1973（昭和48）年に終わりを迎えます。それまでの重労働で恭一さんが体を壊したことで、さらに、干ばつで乳牛に飲ませる水が確保できなくなったことが原因でした。酪農を始めるにあたって整備した設備やパイプラインもあり、負債は相当な額だったそうですが、倒産はせずに済みました。乳牛を売ることでのげたからです。それだけ優秀な乳牛たちでした。そして、酪農をやめてからは、昔と同じように野菜を売るようになっていました。

清美さんへ承継

恭一さんから「百姓はするな」といわれて育った清美さん。高専に入って機械工学の勉強をしていました。その後、明石市の工場に勤めますが、ご両親の面倒をみるため松江に戻ります。それでも恭一さんの言葉どおり専業農家とはならず、農作業もしながら斐川の工場に定年まで勤めました。一方恭一さんは、1988（昭和63）年、結核のため66歳で亡くなりました。清美さんによれば、空山地区の開拓第一世代でご存命なのは、女性ばかりだそうです。

空山地区に住まず、忌部から通っている清美さん。同じように空山地区に畑を維持しているのは、現在14軒ほどだと

か。そのほとんどは、清美さん同様、空山以外に住んで通っていらっしゃるそうです。一方、第一世代から代替わりして二世として畑で生計を立てている方や、Iターンして空山で畑をやっている方もいらっしゃるとのこと。ただし、さらにその次の世代が畑仕事を手伝う光景はなかなか見えないそうで、集落としては「限界」を迎えようとしていると感じるそうです。たとえば、耕作放棄地に葛が生えたと、たとえ1年でも耕作再開は困難になるといいます。また、以前牧草地だったサツカーコートほどの土地は、すでに木が生えて山に戻っているそうです。耕



右斜面の上 牧草地だったところには木が生えています

空山から松江市内を展望できます



作者が減れば、空山の風景も変わっていくことになるでしょう。

とはいえ、今は毎日のように畑に通う清美さんは、ブルーベリーやブドウも育て、野菜作りにも励んでいます。でも、今の清美さんの敵は、薬に耐性を持ち始める虫や、落ちているブドウを食べて味を覚えてしまい、垂れた枝に飛びついて実を食べるイノシシ。そして、なんといっても気候変動だそうです。

人が開いた土地から人の姿が減り、自然は当然のこととしてその隙を埋める。そのサイクルは、実は人類の過去と未来をシミュルに凝縮して見せてくれているようにも思います。空山地区の営みが、今後どう続いていくのか。とても気になるところです。

(やまねしげき 文化情報学科教員)



この日は大山も見えました



清美さんが育てるブルーベリー



空山地区の西側には、空山神社が建っています



空山神社の下には、本誌 2 号で紹介した
Sunday Market Cibo の常連、
がっちゃん畑／さとまるの森があります



編集後記

☆ポニーの森を取材している中で動物たちの表情を見ると、吾郷さんをとて信頼している眼差しを感じることができ、人を信頼しているからこそ、初めて来るお客さんでも心を開き、癒されるのではないかと思います。また、吾郷さんのセラピーを受けた方が家族や友人に紹介すると聞き、吾郷さんの明るいお人柄からお客さんが紹介したいと思うことに繋がっているのだと感じました。取材を許可していただいた吾郷さん、ありがとうございました。

(桃)

☆「おやつものがたりHoppe」さんへのインタビューを通して、私自身も食物アレルギーを持っているので、島根にこんなお店ができるなんて！と、とても嬉しかったのを覚えています。そして今回、お話を聞くことができ、すごく苦労されてケーキを作っておられるんだなと感じました。アレルギーを持っていても、もっていないくても、とても美味しい優しい味なので皆さんもぜひ行ってみてください！最後に、今回インタビューへのご協力をいただいた眞田さん、ありがとうございました。

(萌)

☆「ひだまりのおと」制作にて、取材のアポ取りから記事の執筆、レイアウトまで初めてすることの連続で、短大生活最後にいい経験ができたと感じています。

私の拙い文章のせいで魅力が上手く伝えきれていなかったら悔しいのですが、温かいお店に巡りあえてそれを多くのの人に覚えてもらえる記事にできて嬉しいです。今回の制作に関わってくださったすべての方々に感謝します。素敵なご縁にも「ひだまりのおと」第6号を通して皆様の未来が明るく拓けますように。

(都)

☆偶然立ち寄ったお店での出会いから始まった本取材。もっと知りたい、誰かに伝えたい。そんな思いから、私は心を躍らせながら取材に臨むことができました。本取材を通じて、幸せの多様さと、それを大事にする事の尊さを教えていただいたような気がします。素敵な出会いに心からの感謝を。

(結)

☆入学前から興味を持っていた「ひだまりのおと」制作。取材をする中で私自身学ぶことが多く、貴重な経験をさせていだいたと思っています。取材先の決定やインタビュー、取材後の編集作業などをやる中で、わからないなりに「がむしゃらに」やってみる事の大切さに気づかれました。新たな扉を開くために多く

の人が常日頃一生懸命生きています。そんなカッコいい方と出会えたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

(寿)

☆今回私は、「ひらく」というテーマの下、openpace 美南さんに取材をさせていただきました。以前から魅力的に感じていた場所を取材することができて、とても嬉しかったです。安達様からお話を聞く中で、ひとつの場所を通してたくさんの人たちが繋がっていくことの素晴らしさや、お客様に真剣に向き合う仕事への熱意を感じることができました。この度はお忙しい中、取材にご協力いただき本当にありがとうございました。

(兵)

☆取材から編集まで自分で行うことの大変さを学びました。記事の本文、記事のレイアウトなどで何度も悩みましたが納得ができるものになりました。取材させていだいた井川さん、プロジェクトゆうあいの皆様、協力していただき本当にありがとうございました。

(壮)

ひだまりのおと 第6号

2025 年 3 月 20 日発行

編集 『ひだまりのおと』編集部

責任者 山根繁樹

E-mail : s-yamane@u-shimane.ac.jp

発行 島根県立大学短期大学部

文化情報学科

〒 690-0044

島根県松江市浜乃木 7 丁目 24-2

TEL. 0852-26-5525 (代表)

FAX. 0852-21-8150

印刷 今井印刷株式会社

制作指導 小倉佳代子 日高正樹 山根繁樹

☆巻頭言には、長らく人間文化学部地域文化学科で「詩の鑑賞と創作」の授業をご担当いただいた、川辺真(山根道雄)先生からご寄稿いただきました。お忙しいところ、誠にありがとうございました。さて、偶然にも今号は、取材対象者に女性が多く、記事横断的に比較的年齢の近い女性たちの活躍を取り上げる結果になりました。島根の地でそれぞれに歩まれている姿から、学生たちが何を感じ、それをどのように表現しているか、お楽しみいただければと思います。記者としての私は、開拓地を案内していただき、山間地の風景の見える方が変わりました。遠藤さん、ありがとうございました。(繁)



出雲市 斐川町 mamenino